

フランスの語用論研究

東郷 雄二

0. はじめに

語用論が言語学において、具体的にどのような研究領域をカバーするのは難しい問題である。例えば最近の例では Verschueren (1999 : 1) が語用論を次のように定義している。

“At the most elementary level, pragmatics can be defined as *the study of language use*, or, to employ a somewhat more complicated phrasing, *the study of linguistic phenomena from the point of view of their usage properties and processes.*”

これは語用論の定義としてはかなり広い定義であり、これでは言語の使用に関わるすべての現象を包括することになりかねない。語用論がしばしば“waste-basket of linguistics”と呼ばれる所以である。一方、Mey (1993 : 42)によれば、語用論の目標は次のようになる。

“pragmatics is the study of the conditions of human language uses as these are determined by the context of society.”

この定義では言語使用の社会的側面が強調されており、それに呼応するように、Meyの本には“Societal Pragmatics”なる一章が設けられている。

このような広い定義とは対照的な狭い定義の代表は Levinson (1983 : 9)のそれであろう。

“Pragmatics is the study of those relations between language and context that are *grammaticalized*, or encoded in the structure of a language.”

このLevinsonの定義には、言語と文脈・状況との関係のうちで、言語的マーカーとし

て文法化されたもの（すなわち構造化されたもの）のみを扱うという態度が明瞭に見てとれる。

Ducrot & Schaeffer (1995 : 112)は、語用論を意味論と区別する困難さを指摘したうえで、語用論を便宜的に *pragmatique₁* と *pragmatique₂* とに分けている。彼らによれば、*pragmatique₁* とは、「文の意味のうち、その文が使用された状況に由来し、単に言語の構造のみによって決定されないものを扱う」ものである。一方、*pragmatique₂* とは、「言葉の意味に状況が及ぼす効果を扱うのではなく、逆に言葉が状況に及ぼす効果を扱う」ものとされている。前者には指示・ダイクシス・時制・前提・発話意図などの問題が含まれ、後者には発話行為・会話の含意・ポライトネスなどの問題が含まれると考えてよかろう。伝統的にフランスでは、*pragmatique₁* に属する問題が広く研究対象とされてきた。それはフランス言語学が *énonciation* 「発話」¹ という視点を重視してきたことに深く関係する。

1. *énonciation* 「発話」

言語研究における *énonciation* の重要性をいち早く示したのは Emile Benveniste である。Todorov (1970) は *énonciation* を次のように簡潔に定義している。“l’*énonciation* est l’acte individuel d’utilisation de la langue.” 「発話とは言語（ラング）を個々に使用する行為をいう」。ラングは発話以前には、単にラングの可能性でしかない。ラングは、個々の発話者が聞き手を前にして、ある状況において何かについて語るという、一回一回の使用によって、初めて肉化され実現されるのである。従って *énonciation* の言語学とは、潜在態としてのラングが、具体的状況においていかに実現されるかという問題を解明することになる。Benveniste (1956) は、このような視点から人称の問題を考察し、発話者である一人称や、共発話者である二人称とは異なり、三人称は実は *non-personne* 「無人称」であるという分析を提示した。また Benveniste (1959) は、フランス語の動詞時制組織は、発話者の *ego* を中心とした *discours* という発話レベルに属する時制と、*ego* とは関わりを切断された時間軸に依拠する *histoire* という発話レベルに属する時制とに二分されることを明らかにした。この研究は Weinrich (1971) に引き継がれ、テキスト言語学の流れを形成することになった画期的論文である。

1970年までのフランスにおける語用論の流れを跡づけた Nerlich (1986) によると、フランスにおいて *énonciation* という概念が確実に市民権を得たのは1970年であるという。この年に Todorov の編集による *Langages* 誌の *énonciation* 特集号が刊行されたのである。その後、*énonciation* の視点に立つ言語研究は、フランス言語学の顕著な特徴のひとつとなっていく。この視点に立つ研究は、たとえ「語用論」を標榜していなくても、発話者や状況を通しての言語の使用の問題を考えることで、語用論的研究になってい

るといえるだろう。

2. 指示とダイクシス研究

énonciation に密接に関係するのは、指示とダイクシス（直示詞）研究であろう。ダイクシスの問題についての近年の最大の成果は Morel & Danon-Boileau (1992) である。1990年に Sorbonne で開催されたシンポジウムの論文集である本書には、58にものぼる論文が収録されている。全体は、「通時的視点」「様々な言語におけるダイクシス」「ダイクシス、空間、時間」「ダイクシスに現れる主観性」「心理言語学」「ダイクシスと指示」「ダイクシスと談話構築」の7部門にわかれており、現在のところフランスにおけるこの問題の最も包括的な研究書となっている。

指示に関しては、ストラスブール大学の Kleiber (1994) とレンヌ大学の Corblin (1995) が注目に値する。照応的代名詞が、Halliday & Hasan (1976) 流の、先行詞 Paul と照応詞 he のあいだのテキスト的關係だけでは十分に扱えないことは、次第に明らかになっているが、Kleiber (1994) は談話の構築と照応に問題にさらに一步踏み込み、分析哲学者 Kaplan (1989) の context of use / circumstances of evaluation という概念を用いることで斬新な代名詞の理論を提示している。Kleiber にとって重要なのは指示対象そのものではなく、その対象が談話のなかでどのように提示されているか (mode de donation de l'objet) であり、用いられる照応表現はその提示方法に依存するのである。

Corblin (1995) は Kleiber に較べれば、もう少しテキスト言語学的な枠組みにとどまっているが、指示の連鎖 (chaîne de référence) という概念を中心に据えて、定名詞句と指示形容詞句の差などについて、詳細な観察を行なっている。

Récanati (1979) は、フランスでは比較的早い時期の包括的な語用論概説書であり、指示の不透明性や遂行的発話の問題を扱っている。Récanati はその後、Kripke や Donnellan らのラインの分析哲学的な指示の問題に傾斜し、Récanati (1997) を出版している。題名の示すとおり、直接指示理論を広範囲に論じたものだが、この本が英語で出版されたということが象徴的である。分析哲学的指示理論は、アングロ・サクソン、つまり英語圏で盛んに行なわれており、フランスではあまり読者を持たないのである。

最後に指示の問題で忘れてはならないのは Fauconnier の創始したメンタル・スペース理論である。Fauconnier は1987年まではパリ第8大学の教授であったが、1988年からはカリフォルニア大学サンディエゴ校に活動の拠点を移してしまった。メンタル・スペース理論による研究は、主にアメリカと日本で行なわれており、本稿の守備範囲を外れるので、ここでは詳述しない。

3. ADL理論 - Ducrot と Anscombe

ADLとは HEESS² の Ducrot と Anscombe が長年構築をめざして論究を積み重ねている la théorie de l'argumentation dans la langue 「言語における論証の理論」のことである。Ducrot は Ducrot (1972) により、フランスにおける語用論研究のパイオニアと見なされているが、実はこの本の副題は「言語の意味理論の原理」となっていて、Ducrot 本人は自分の研究を必ずしも語用論とは見なしていない。しかし、その論究は一貫して発話の意味のメカニズムにおいて隠されたもの (implicite) の解明をめざしている。ADL 理論については Anscombe & Ducrot (1983), Ducrot (1981), Ducrot (1984), Anscombe (1995) などの著書や、Ducrot (1993) など数多くの論文がある。ADL 理論は、最初は peu 「少ししか(...) ない」, presque 「ほとんど」などの操作子や、mais 「しかし」, pourtant 「にもかかわらず」などの結合子の分析が中心であったが、最近では動詞や形容詞の語彙的意味論への拡張が試みられている³。

ここでは Ducrot の理論のなかで重要な役割を占める polyphonic 「多声」と topos 「トボス」の概念について簡単に紹介しよう。Ducrot らが扱う argumentation 「論証」とは、ふたつの発話 A と B の連鎖で、A が B の argument 「論拠」として提示されているものである。例えば、«Il fait beau. Allons à la plage!» 「いい天気だ。海へ行こう」という連鎖で、「いい天気だ」という発話は、「海へ行く」という行為を提案する論拠として用いられている。Ducrot が問いかけるのは、なぜ「いい天気だ」という事実は、「海へ行く」ことを正当化する論拠たりうるのかという点である。Ducrot はそこには「隠されたもの」(implicite) が存在すると考える。それは、「好天は海水浴に適している」という信念である。Ducrot はこれをトボスと呼ぶ。トボスとは、話し手と聞き手が属する共同体のメンバーに共有された信念の体系であり、多数の具体的状況に適用可能な一般性を持つとされている。われわれは「いい天気だ。海へ行こう」のような発話を行なうときに、暗黙のうちに第三の隠れた要素であるトボスを発動しているのだというのが Ducrot の考えである。

同じ文脈で «Il fait beau, mais je suis fatigué.» 「いい天気だが、疲れているんだ」という発話には、polyphonic の現象が認められる。話し手は前半の「いい天気だ」の発話に際しては、先の例と同じく「好天は海水浴に適している」というトボスを発動している。ところが、後半の「疲れているんだ」の発話では、これとは異なるもう一人の発話者 énonciateur を導入している。これはもうひとつの「視点」を登場させているというと同値である。ここで発動されたトボスは「疲れているときには海水浴は適さない」というものであろう。このように一連の論証において、ひとりの話し手が複数の発話者を登場させる現象を polyphonic と呼んでいるのである。

最近の研究では、トボスは語彙的意味論にまで応用されて、«Pierre est un parent,

mais (un parent) éloigné.」 「ピエールは親戚だが、遠い親戚だ」は可能な発話なのに、
«Pierre est un parent, mais (un parent) proche.» 「ピエールは親戚だが、近い親戚だ」は不
自然なのはなぜかといった語彙的問題の解明も試みられている。

4. 談話研究

談話 discours というスタンスは話し手・聞き手と発話の場を想定し、語用論が様々
に研究してきた領域である。ところがフランスでは談話研究は少なくとも近年までは
あまり盛んであったとは言えない。それは「談話は言語学者にとって常に問題のある
対象であった」⁴ からであり、「談話は大部分それを構成する言表に還元することが
でき、このため談話分析は語用論に還元される」⁵ からであり、「現在のところ談話の
言語学は明確に規定された研究対象を持つひとつの分野ではない。互いに密接に関係
する複数の学問分野の総体なのであり、言語をその単位と規則に閉じこめることなく、
社会的・心理学的・歴史的連関において考察しようする」⁶ のものだと言われている
からである。

談話研究はその対象の規定の難しさに加えて、談話固有の特性を抽出するためには
具体性の海に漕ぎ出して、例えば Givón (1983) が試みたような統計的手法に訴える必
要がある。しかし、そこから抽出されるものは、傾向であり規則ではない。私見にな
るが、抽象的な規則の体系を描くことを好むフランス人の精神的傾向には、これは余
り魅力的な道とは映らないのではないだろうか。

そんななかでも精力的に談話研究を展開しているのは、Moeschler らのグループであ
る。Moeschler はジュネーヴ大学教授で⁷、Moeschler (1985, 1996), Reboul & Moeschler
(1998) などの著書がある。ナンシー大学出版局の «processus discursif» シリーズからは、
Charolles et al. (1990), Moeschler et al. (1994) などの論文集が出版されている。Moeschler
らのグループの研究は、談話構築に関わる指示・照応・時制などを取り上げることが
多く、談話研究のなかでもテキスト言語学的色彩が強い。これもまたフランスにおけ
る談話研究のひとつの特徴である。

南仏のエクス・アン・プロヴァンス大学では、Blanche-Benveniste を中心として、会
話フランス語のコーパス研究が行なわれていて、雑誌 *Recherches sur le français parlé* が
刊行されている。その成果の一部は Blanche-Benveniste (1990, 1997) に見ることができ
る。会話コーパスの研究においては、話し言葉という言語レベルに特有の現象が観察
されており、伝統的に書き言葉を中心として展開してきたフランスの言語学において
は、このグループの研究は異色と言えよう。ただ、グループのリーダーの Blanche-
Benveniste の関心は、会話コーパスを通して現れるフランス語の文法構造に向いてお
り、談話の構築を解明するための独自の理論がない点が残念である。

さきに Ducrot & Schaeffer (1995) の示した *pragmatique*₁ と *pragmatique*₂ の区別を紹介したが、このうち *pragmatique*₂ を扱った研究はフランスでは少ない。リヨン第2大学の Kerbrat-Orecchioni には、Kerbrat-Orecchioni (1990, 1992, 1994) の著作があり、相互行為としての会話分析の研究を行なっているが、いずれの著作も教科書的であり、あまり従来の知見に新しいものを付け加えるものにはなっていない。

5. おわりに

フランスでは今まで語用論の名を冠した専門雑誌はなかったが、1997年に *Revue de sémantique et pragmatique* が創刊された。創刊号に掲載された Nemo & Cadiot (1997) は、意味論と語用論の守備範囲をいかに区別するかを論じており、現在のフランスの研究者の問題意識を反映していて興味深い。彼らは意味論と語用論が扱ってきた諸問題の相関図を作成している。X軸のプラス方向に *communication* 「コミュニケーション」、マイナス方向に *langue* 「ラング」、Y軸のプラス方向に *interaction* 「相互行為」、マイナス方向に *dénotation* 「指示」の4つのキーワードを配し、X軸とY軸で区切られた4つの領域に様々な問題を位置づけている。第1象限には「会話、ポライトネス、会話の公準」、第2象限には「談話、論証、polyphonie」、第3象限には「意義素、語彙的意味、文、*énonciation*」、第4象限には「前提、信念の世界、メンタル・スペース、関与性」などを配置している。この論文の結論は、意味論と語用論は、それぞれの独自性を保ちつつも協調して発展しなければならないという平凡なものだが、それがかえって未だに語用論独自の研究領域について、言語学者のあいだに意見の一致がないフランスの現状を露呈しているようにも受け取れる。

【注】

- (1) 『ラールース言語学辞典』（大修館書店）では、*énonciation* を「発話行為」と訳しているが、本稿では単に「発話」とする。Austin 流の発話行為の概念との混同を避けるためである。
- (2) Hautes Etudes en Sciences Sociales (社会科学高等研究院) の略。この機関は研究活動を主目的とする一種の大学院大学に近い。
- (3) ADL理論の手際の良い紹介として、喜田浩平「J.-Cl. Anscombe “Dynamique du sens et scalarité”の紹介」『フランス語学研究』29号、64-69、喜田浩平「語彙的意味論と「論証」理論」『フランス語学研究』30号、59-64がある。
- (4) «Le discours a toujours été pour les linguistes un objet problématique.» (Charolles et al. 1990 : 7)
- (5) «... le discours se ramène largement aux énoncés qui le composent et que l'analyse du discours se ramène, dès lors, à la pragmatique.» (Reboul & Moeschler 1998 : 47)
- (6) «... la linguistique du discours désigne aujourd'hui non une discipline qui aurait un objet bien circonscrit mais un ensemble de disciplines étroitement liées qui, au lieu de replier le langage sur l'arbitraire de ses unités et de ses règles, l'appréhende en le rapportant à des ancrages sociaux,

psychologiques, historiques...» (Mangueneau 1976 : 11)

(7) ジュネーヴはもちろんフランスという範囲からは外れるが、Moeschlerの協力者はフランス人が多く、便宜的に本稿の扱う範囲に含めておく。

【参考文献】

- Anscombe, J.-Cl. & Ducrot, O. 1983. *L'argumentation dans la langue*, Liège, Mardaga.
- Anscombe, J.-Cl. (ed) 1995. *Théorie des topoï*, Paris, Kimé.
- Benveniste, E. 1956. "La nature des pronoms", *For Roman Jakobson*, Den Hague, Mouton ; Benveniste (1966) に収録.
- Benveniste, E. 1959. "Les relations de temps dans le verbe français", *Bulletin de la Société de Linguistique* 54.; Benveniste (1966) に収録.
- Benveniste, E. 1966. *Problèmes de linguistique générale I*, Paris, Gallimard.
- Blanche-Benveniste, Cl. 1990. *Le français parlé. Etudes grammaticales*, Paris, Editions du CNRS.
- Blanche-Benveniste, Cl. 1997. *Approches de la langue parlée en français*, Paris, Ophrys.
- Charolles, M., Fisher, S., Jayez, J. 1990. *Le discours. Représentations et interprétation*, Nancy, Presses Universitaires de Nancy.
- Corblin, F. 1995. *Les formes de reprises dans le discours. Anaphores et chaînes de référence*. Rennes, Presses Universitaires de Renne.
- Ducrot, O. 1972. *Dire et ne pas dire. Principes de sémantique linguistique*. Paris, Hermann.
- Ducrot, O. 1981. *Les échelles argumentatives*, Paris, Editions de Minuit.
- Ducrot, O. 1984. *Le dire et le dit*, Paris, Editions de Minuit.
- Ducrot, O. 1993. "Les topoï dans la 'théorie de l'argumentation dans la langue'", in Ch. Plantin (ed) *Lieux communs*, Paris, Kimé.
- Ducrot, O. & J.M. Shaeffer, 1995, *Nouveau dictionnaire encyclopédique des sciences du langage*, Paris, Editions du Seuil.
- Givón, T. 1983. *Topic Continuity in Discourse. A Quantitative Cross-Language Study*, Amsterdam, J. Benjamins.
- Halliday, M.A.K. & Hasan, R. 1976. *Cohesion in English*, London, Longman ; 『テキストはどのように構成されるか』、ひつじ書房
- Kaplan, D. 1989. "Demonstratives", in Almog et al. (eds) *Themes from Kaplan*, Oxford, Oxford UP.
- Kerbrat-Orecchioni, C. 1990. *Les interactions verbales 1*, Paris, Armand Colin.
- Kerbrat-Orecchioni, C. 1992. *Les interactions verbales 2*, Paris, Armand Colin.
- Kerbrat-Orecchioni, C. 1994. *Les interactions verbales 3*, Paris, Armand Colin.
- Kleiber, G. 1994. *Anaphores et pronoms*, Louvain-la-Neuve, Duculot.
- Levinson, S.C. 1983. *Pragmatics*, Cambridge, Cambridge UP.

- Mangueneau, D. 1976. *Initiations aux méthodes de l'analyse de discours*, Paris, Hachette.
- Mey, J.L. 1993. *Pragmatics. An Introduction*, Oxford, Blackwell.
- Morel, M.-A., Danon-Boileau, L. 1992. *La deixis*, Paris, PUF.
- Moeschler, J. 1985. *Argumentation et conversation. Elements pour une analyse pragmatique du discours*, Berne, Peter Lang.
- Moeschler, J. 1996. *Théorie pragmatique et pragmatique conversationnelle*, Paris, Armand Colin.
- Moeschler, J., Reboul, A., Luscher, J.-M., Jayez, J. 1994. *Langage et pertinence*, Nancy, Presses Universitaires de Nancy.
- Nemo, F., Cadiot, P. 1997. "Un problème insoluble? (1)", *Revue de sémantique et pragmatique* 1, 15-22.
- Nerlich, B. 1986. *La pragmatique. Tradition ou évolution dans l'histoire de la linguistique française?*, Berne, Peter Lang.
- Récanati, F. 1979. *La transparence et l'énonciation. Pour introduire à la pragmatique*, Paris, Editions du Seuil.
- Récanati, F. 1997. *Direct Reference. From language to thought*, Oxford, Blackwell.
- Reboul, A., Moeschler, J. 1998. *Pragmatique du discours*, Paris, Armand Colin.
- Todorov, T. 1970. "Problème de l'énonciation", *Langages* 17, 3-11.
- Verschueren, J. 1999, *Understanding Pragmatics*, London, Arnold.
- Weinrich, H. 1964. *Tempus*, Stuttgart, Kohlhammer, 『時制論 - 文学テキストの分析』、紀伊國屋書店